



贈DVD光盘

日语教学必备丛书

日语语言教学基础知识

高见泽孟 (日) / 主编

高见泽孟

亨特荫山裕子

池田悠子

(日) / 著

伊藤博文

宇佐美真由美

西川寿美

于日平 / 编译

日本語教育に携わるすべての方へ。
「これだけは」知っておかなければ
ならない知識が満載です。

外语教学与研究出版社

日语教学必备丛书

日语语言教学基础知识

高见泽孟 (日) / 主编

高见泽孟

亨特荫山裕子

池田悠子

伊藤博文

宇佐美真由美

西川寿美

于日平 / 编译

日本語教育に携わるすべての方へ。
「これだけは」知っておかなければ
ならない知識が満載です。

外语教学与研究出版社
北京

京权图字: 01 - 2009 - 3634

Copyright by © Hajime Takamizawa, Yuko Kageyama Hunt, Yuko Ikeda, Hirofumi Ito, Mayumi Usami, Sumi Nishikawa 2004
Originally published by ASK Publishing Co., Ltd., Tokyo, Japan

图书在版编目(CIP)数据

日语语言教学基础知识 / (日) 高见泽孟主编; (日) 高见泽孟等著; 于日平编译. — 北京: 外语教学与研究出版社, 2009.8

(日语教学必备丛书)

ISBN 978 - 7 - 5600 - 8920 - 1

I. 日… II. ①高… ②高… ③于… III. 日语—语言教学 IV. H369

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2009) 第 149088 号

universal tool · unique value · useful source · unanimous choice



悠游外语网

www.2u4u.com.cn

外研社全新推出读者增值服务网站, 独家打造双语互动资源

欢迎你:

- 随时检测个人的外语水平和专项能力
- 在线阅读外语读物、学习外语网络课程
- 在线观看双语视频、名家课堂、外语系列讲座
- 下载外语经典图书、有声读物、学习软件、翻译软件
- 参与社区互动小组, 参加线上各种比赛和联谊活动
- 咨询在线专家, 解答外语学习中的疑难

此外, 你还可以通过积累购书积分, 兑换图书、电子书、培训课程和其他增值服务……

你有你“优”, 你的优势就是你的拥有。即刻登录, 抢先体验!

出版人: 于春迟

责任编辑: 刘宜欣

封面设计: 张 峰

出版发行: 外语教学与研究出版社

社 址: 北京市西三环北路 19 号 (100089)

网 址: <http://www.fltrp.com>

印 刷: 北京京科印刷有限公司

开 本: 787×1092 1/16

印 张: 18.5

版 次: 2009 年 8 月第 1 版 2009 年 8 月第 1 次印刷

书 号: ISBN 978 - 7 - 5600 - 8920 - 1

定 价: 45.00 元 (赠 DVD 光盘一张)

* * *

如有印刷、装订质量问题出版社负责调换

制售盗版必究 举报查实奖励

版权保护办公室举报电话: (010)88817519

物料号: 189200001

出版说明

为满足日语学习、研究者以及初涉日语教学的教师等各方面、多层次的需求，我社特地推出了《日语教学必备丛书》系列。本丛书收录内容丰富，既有适用于初学者的语音、语法教学方面的介绍，也有对日语研究者最关注的新型理论研究成果的讲解，还包括对日语教学中涉及到的功能句型、词汇、语法等方面的具体知识的指导，同时还广泛涉及了与日语教学相关的语言、文化等方面的理论研究等。本系列覆盖面广，讲解精细，是对日语教学经验的介绍和总结。

《日语语言教学基础知识》为其中的一册，本书内容大致如下：

本书引进自日本 ASK 出版社（『新・はじめての日本語教育 1 日本語教育の基礎知識』），是一本可读、可听、可看的全方位日语教学指导用书。本书对日语语言教学中的语音、语法、表记、词汇、社会语言学、心理学、第二语言习得理论等方面的必要知识进行了简明易懂的解说。配有现场课堂教学实录，以有效地提高课堂教学效果。为了方便读者的理解，我们还请这方面的专家做了相应的编译。

本书附赠 DVD 光盘（『DVD はじめての日本語教育・1』）。

外语教学与研究出版社

はじめに

21世紀に入り、国内、海外ともに外国人の日本語学習者は増加傾向にあり、学習目的の多様化がさらに進んでいます。そして、日本語教師の必要性もますます高まってきています。外国人日本語学習者のさまざまなニーズに応えるためには、日本語教師も基本的な学習が必要になります。

日本人なら「正しい日本語」が話せるのは確かですが、それだけでは、外国人に日本語を教えることはできません。外国人に日本語を教える教師は、「日本語」について知ることが必要ですし、さらに、それらを外国人にわかりやすく説明する技術も必要です。そのためには、まず、「日本語」そのものについて学習し、それらが「他の言語（＝学習者の母語）と比べて、どんな特徴をもっているのか」をも研究しなければなりません。つまり、外国人学習者の立場からの「日本語」の研究が求められているのです。

本書は、日本語教育に必要な最小限の「基礎知識」を提供します。日本語のいろいろな特徴をわかりやすく解説してありますので、専門分野の学習経験をもたない人たちにも容易に理解できるものと思います。その意味で、これから新たに日本語教育を志す人たちや他の分野から日本語教育に入ってきたために日本語そのものの知識について不安を感じている現職教師たち、本格的な研究をする時間的な余裕のないボランティア教師のためにも適切な「日本語学習」の入門書になります。

また、本書では、日本語教育の背景知識として「学習者心理」や「第二言語習得理論」などの解説も取り上げていますが、日本語教授法の研究には、本シリーズの「新・はじめての日本語教育2 日本語教授法入門」で学習していただきたいと思います。

本書は、あくまでも「日本語教育の基礎知識」のための入門書ですから、さらに詳しい知識を得るためには、巻末の「参考図書」欄にある専門書を研究することを勧めます。

監修者 高見澤 孟

目次

第1章	言語としての日本語.....	7
第2章	日本語の音声	23
第3章	日本語の文法	45
第4章	文字・表記	117
	[参考] 日本語の文字の歴史	150
第5章	語彙	161
第6章	社会言語学——ことばと社会のかかわり——	177
第7章	心理学——学ぶということのメカニズム——	205
第8章	第二言語習得	235
付録		
	日本語教育史年表	275
	確認問題・課題 解答例	278
	参考図書ガイド	281
	INDEX	288

本書の特色

本書は、日本語教育に全く携わったことのない人のために、日本語を教える際に必要最低限の基礎知識をわかりやすく解説しています。また、日本語教育能力検定試験対策の入門書としてもご使用になれます。本書で得た基礎的な知識は、専門書をお読みになるときの助けとなるでしょう。

●全体構成●

本書は8章と〔参考〕／付録に分かれています。1～5章で文法や音声などの「日本語」の基礎知識、6～8章では、心理学など日本語教育の考え方の背景となるような基礎知識を紹介しています。

●考えてみましょう&確認問題&課題●

本書は、要所要所に問題を用意し、主体的に学べるような工夫がなされています。

※「考えてみましょう」についての解説は、本文中に、「確認問題」「課題」の解答・解説は巻末に用意されています。

●参考図書●

巻末には、参考図書のリストが用意されています。もう少し専門的に学びたいという方は、参考図書の中から自分に合った本を探されるとよいでしょう。

「DVD・はじめての日本語教育・1」のお知らせ

「DVD はじめての日本語教育・1」は、本書の第2章に対応しています。日本語音声学の基礎を映像でわかりやすく解説。日本語の母音、子音の調音器官や調音方法を学びながら自分の発音のクリニックもできます。

DVD はじめての日本語教育・1 **—日本語の音声—**

日本語の音節
日本語の母音と子音
日本語の音素
母音の無声化
日本語のアクセント
日本語のイントネーション

本書を読みながら、要所要所でDVDを参照することで、より一層理解を深めることができますでしょう。

また、単に日本語音声学の基礎を学ぶだけでなく、一つ一つの母音、子音の調音方法を図で見えていながら、発音のクリニックが可能です。自分が日本語の標準的な発音を行っているかどうかをチェックする意味でも役立ちます。

第1章

言語としての日本語

- 1 日本語はどこから来たか …………… 8
- 2 語順から見た日本語 …………… 9
- 3 日本語はどんな類型に属するか… 10
- 4 日本語にはどんな特性があるか… 13

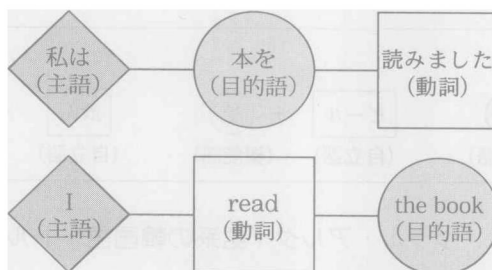
日本語教師にとって、「日本語はどんな言語か」という問題は、避けて通ることはできません。それは日本語を学習する外国人学習者の最大の関心事だからです。それだけに、日本語教師は日本語の言語的な成り立ちや他の言語との関わりなどを研究し、授業中に尋ねられる学習者からの質問に備えなければなりません。

その意味で、この第1章「言語としての日本語」の内容はごく概略的な情報にすぎませんが、基礎的な知識として学習してください。

こう考えると、「日本人はどこから来たのか」と「日本語はどこから来たのか」は別の問題ということになります。言語面から日本語の系統を探る研究は、明治以降盛んになり、数多くの学者によって多くの学説が発表されています。言語の起源や系統の研究で、日本語はいろいろな言語との関係が主張されてきています。その中で有力な学説だけを取り上げても、以下のように多くの言語との関係について検討されてきました。

(1) インド・ゲルマン語に系統を求める説
(2) ヨーロッパ諸語との関連を探る説 など

母语指自己国家的语言。
使用自己国家的语言说话
的人称为母语使用者。



3 日本語はどんな類型に属するか

ある言語の特性を考えるためには、まずその言語がどんなタイプなのかを明らかにする必要があります。言語を分類する方法としては、次の2種類があります。

I 発生的（あるいは、系統的）分類

これはすでに前項で検討しましたが、日本語の場合、あまり明確な結論は出ません。アルタイ諸語（㊦）の一つであるとみなされることが多いようですが、その他の地域の言語との類似も指摘されているので、どの語族（language family、㊦）に属するかは不明です。よって、この分類から特性を考えるのは難しいと言えます。

㊦ **アルタイ諸語**
モンゴル、ツングース諸語の総称。

アル泰語系
指属于阿尔泰语系的各
种语言，有蒙古语、通
古斯语等。

II 類型論的な分類

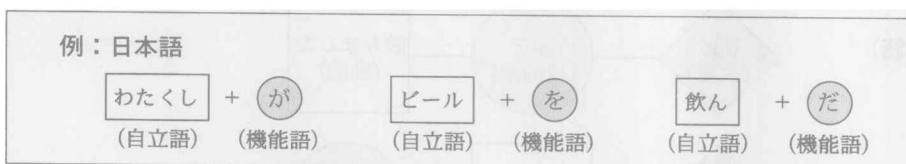
この分類は、言語の形式上の類似性に基づいた分類方法です。つまり、音韻や文法、語彙の点から言語を構造的に分類しようとする試みです。この面から日本語はどんな言語だと言えるのでしょうか。世界の言語には、どんな類型があるのでしょうか。外国人と「日本語」について話し合うときの参考資料として勉強しておきましょう。

㊦ **語族**
(language family)
共通の祖語から派生したと考えられる諸言語の総称。音韻的・語彙的・統語的対応が見られる。インド・ヨーロッパ語族、ウラル語族、アフロ・アジア語族、ドラヴィダ語族、シナ・チベット語族、オーストロネシア語族、オーストロ・アジア語族、アルタイ語族、ニジェール・コルドファン語族など。下位類として語派、その下に語群がある。

語族
从共同的母语中派生出的各种语言的总称。可以找到音韵上的、词汇上的、句法上的对应关系。有印欧语系、乌拉尔语系、闪-含语系（亚非语系）、达罗毗荼语系（德拉维达语系）、汉藏语系、南岛语系（马来-波利尼西亚语系）、南亚语系、阿尔泰语系、尼日尔-科尔多凡语系等。其下位称为语派，再下位是语群。

① 膠着語 (agglutinating language)

日本語はこの類型に属します。膠着語では、「実質的な意味を示す」自立語（名詞や動詞の語幹など）に「文法上の意味を示す」機能語（助詞や動詞の活用部分など）が膠でつけられたように付着して、文の中でその語の果たす役割（＝文法的機能）を表します。日本語の名詞は、助詞という文法的な機能を示す語を伴って、文中で果たす役割が明らかになります。



日本語のほかには、ウラル・アルタイ語系の韓国語、トルコ語、ハンガリー語などが膠着語に属します。

②孤立語 (isolating language)

各単語がそれぞれ実質的な意味を持っていて、文法的機能は「語順」によって表される言語。中国語、ベトナム語、サモア語などが孤立語に属します。

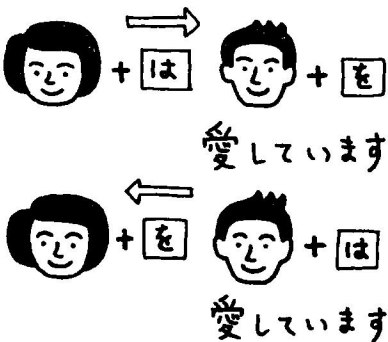
例：中国語

a	我	爱	他。	(私は彼を愛しています。)
	(主語)	(動詞)	(目的語)	
b	他	爱	我。	(彼は私を愛しています。)
	(主語)	(動詞)	(目的語)	

上例に見られるように、「我 (wo)」は、主語にも目的語にも同じ形で使われます。日本語の助詞のような文法的な機能を示す機能語が付いたり、語形が変化したりすることはありません。

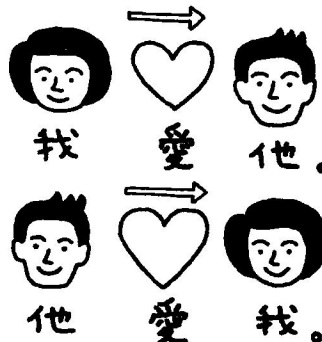
膠着語

〈助詞〉



孤立語

〈語順〉



③屈折語 (inflecting language)

語形変化によって、各単語の文法的な機能が表される言語。ラテン語、ギリシャ語、アラビア語などがその代表的な例です。英語は孤立語の性格も持ちますが、この屈折語に属する言語とされています。

例：英語

a	love (動詞)、	lovely (副詞)、	loveliness (名詞)
b	drink (現在形)、	drank (過去形)、	drunk (過去分詞)

さらに典型的な例としては、ラテン系の言語の人称による動詞の語形変化などが挙げられます。

④抱合語 (incorporating language)

文を構成するすべての要素が1語のように密着した言語。つまり、1語が一つの文の働きを持っています。エスキモー語 (ㇰㇰ)、モホーク語 (ㇰㇰ)、ティウイ語 (ㇰㇰ) などが抱合語に属します。

例： ティウイ語

ngirruunthingapukani. (=私は食べ続けた。)

この文は、1語で一つの文を成していますが、分析すれば、以下のようになります。

ngi-ru	-unthing	-apu	-kani
(私はした)	(しばらく)	(食べる)	(繰り返し)

『言語学百科事典』(大修館書店) 第9部 世界の言語より

言語の類型は、以上の4種類に分けられていますが、実際の言語は、その成り立ちから二つの類型にまたがる特性を持っている場合も少なくありません。英語は、発生的な分類では、ゲルマン語に属していますが、フランス語やイタリア語からの借用語も多く、その用法にも影響を受けていますから、ロマンス語との類似も認められます。そのため類型的な分類の場合にも、英語は孤立語的な特徴(語形変化なしに、語順で文法的な機能が示される…Haruko loves Ichiro.)も、屈折語的な特徴(語形の変化によって文法的な機能が示される…man-men, drink-drunk-drunk)も膠着語的な特徴(単語に文法的な付属部分がついて文法的機能を明らかにする…book-books, tall-taller-tallest)もあります。その意味では、英語は「混合語」であると言えますし、日本語も膠着語に属してはいますが、動詞の活用を観察すると、屈折語的な特徴も見られます。

例： 日本語の動詞の活用

- a 書か(ない) [未然形]
- b 書き(ます) [連用形]
- c 書く [終止形、連体形]
- d 書け [命令形]

ㇰㇰ エスキモー語

西グリーンランドに住む人々(=イヌイット)の言語。

爱斯基摩语

居住在西绿岛的人们使用的语言。

ㇰㇰ モホーク語

米国ニューヨーク州のモホーク川沿いに住んでいた先住民の言語。

摩诃柯语

早先居住在美国纽约州摩诃柯河边的土著民使用的语言。

ㇰㇰ ティウイ語

オーストラリア先住民の言語。

梯韦语

居住在澳大利亚的土著民使用的语言。

4 日本語にはどんな特性があるか

ある言語の特性を考える場合、他の言語と比較するのが早道です。日本語も日本語そのものを分析しているだけでは、日本語の本当の姿は見えてきません。日本語と英語を比較して、はじめて明らかになる特性もあります。これは文法面に限らず、音声面でも言語活動の面でも同じような比較ができます。このように二つの言語を比較研究することを「**対照言語研究 (contrastive study)**」と言います。これによって、二つの言語の共通点と相違点が確認され、言語教育にも役立ちます。と同時にそれぞれの言語の特性もわかるようになります。

外国人の日本語学習者は、よく日本語が「あいまいな言語」だと言います。ここでは、日英の対照研究によって日本語の特性のいくつかを検討して、「あいまい」だと言われる原因を考えてみましょう。

1 「数」に対する意識

日本語は、少数の例外を除いて、名詞に単数、複数の区別をする文法形式はありません。英語は、少数の例外を除いて、名詞に'-s (-es)'をつけるか、語形を変える (man → men) ことによって単数、複数の区別が明らかにされ、しかも文中で使われる場合には、「事実に基づいて」単数が複数かを使い分けなければなりません。日本語の「本を買いました。」という文では、1冊買ったのか数冊買ったのかは不明です。

他方、英語では単数や複数を区別しなければ、文を書き表すことはできません。このような英語の数に対する態度が、言語使用を通して英語国民の思考に影響しているのです。「本を買いました。」という日本語を伝えるのには、英語では数を確認した上で、次のいずれかを使います。

例：英語

I bought a book. (本を1冊買いました)

あるいは

I bought books. (本を数冊買いました)

もちろん、日本語にも複数表現がないわけではありませんが、その区別が可能な名詞はかなり限られています。その他の名詞の場合は、数詞などを使って区別しています。

①名詞の複数形（いわゆる量語^{じょうご}）

同じ名詞を重ねて、複数を示す方法です。

例： 人々、神々、山々、木々、国々 など

このほかにも、同じ造語法で「日々、年々」などがありますが、これは複数を表すより「日常、毎日」とか「年を追うごとに、毎年」などの意味で使われますので除外します。

②接尾辞による複数形

英語と同じように、接尾辞（－たち、－がた、－ら、－ども）を名詞につけて複数を表します。ごく限られた名詞だけがこれらの接尾辞を伴うことができます。

例：
－たち： 人たち、私たち、貴方たち、学生たち、兄弟たち など
－がた： あなたがた、お客様がた、先生がた など
－ら： 彼ら、君ら、子供ら など
－ども： 私ども、子分ども、野郎ども など

接尾辞による複数形の適用できる範囲が人間に限られているのも日本語の特徴です。

これ以外の複数を表す方法としては、数詞（または量を示す名詞）を使う方法もないわけではありません。これには、（１）「数詞十の十名詞」の組み合わせと（２）数詞を副詞的に使う方法とがありますが、日常の会話ではよほどの必要がないかぎり、数詞による厳密な表現は使われません。

例：

1. 数詞十「の」十名詞

- a ここに一冊の本があります。
- b 3日の休みがとれました。
- c 数人の友人が手伝ってくれました。
- d 沢山のファン・レターをいただきました。

2. 数詞の副詞的用法

- a ここに本が一冊あります。
- b 休みが3日とれました。
- c 友人が数人手伝ってくれました。
- d ファン・レターを沢山いただきました。

このように少数の例外を除き、単数、複数の区別をしない言語を使っている日本人は、話し手も聞き手も数を意識しません。数を度外視した日本語の話し方は、日本人の思考に影響を与え、コミュニケーションに際して数量的にあいまいな話し方をする文化を育ててきたと言えます。